

浙江における禅宗の推移

—五代時代について—

鈴木哲雄

一 承前

先の『日本佛教学会年報』第四十一号（昭和五十年度）において、唐末までの浙江における禅宗の推移を概観した。

この拙論はそれを引きついで、五代吳越国においては、禅宗はどう推移し、宋代にどのように受け継がれていくかを管見しようとするものである。浙江地方は古くからの文化を持つところである。禅宗がその地方に土着するためには必ずその地方文化と深いかかわりを持つていると予想する。伝統ある古い文化を持つ地方はなおさらである。しかしながら浙江の文化史的特徴をまずつかまねばならぬ。しかしこのテーマは非常に大きく簡単になしえるわざではない。今はまず第一歩として、禅宗の誰がどこに住したか、そして特徴を示すことがあれば、それはどんなことか、禅宗に

限らず相互に関係することがあれば、どんな人か、どんなことか、そういう位置づけをしておく作業の必要を感じた。従って当面は表面的現象に限って叙述する。

浙江地方について唐代より宋初までの禅宗を一応便宜的に四区分した。第一期は開拓期、第二期は伸張期、第三期は隆昌前期、第四期は隆昌後期である。開拓期は徑山法欽の寂年（七九〇年ごろまで⁽²⁾）とし、伸張期は七八〇年ごろから千頃楚南・陳尊宿の寂年（八八〇年ぐらいまで⁽³⁾）とした。この四期は、結果的に、浙江に住した禅僧の法系の消長の切れ目で区分することとなつた。第二期までと第三期以下とでは、同じ浙江地方の禅宗であつても、時代の動向で性格が変化してきている。第三・四期は五代を中心として唐末から宋初にかかるのであるが、第一・二期の闊達な性格から、吳越国の崇仏に大きな影響を受けたものとなつ

浙江における禪宗の推移 五代時代について (鈴木)

た。錢氏は耽溺するまでに崇仏の念が強かつた。それは建寺建塔に顯著にあらわれてゐる。錢氏(又は吳越王)が建てたとする寺塔(庵は除く)を『咸淳臨安志』(宋潛説友原纂修、清汪遠孫校補、道光十年重刊本)によつて年代順に挙げてみよう。

武肅王錢鏗(八九二十九三二在位)

899 無著院 904 順天院 907 千頃院 921 登雲台 922 青蓮院

923 瑞像院 927 恩德院・惠因院・垂雲院・瑞竜寺 928 天王院

930 宝藏院(=烏竜井) 932 南山昭慶寺

正明元年 帰徳院 正明二年 大安院 正明七年 上方多福院

文穆王伝瓘(九三二十九四一)

933 報慈院 934 延寿院 935 永慶院・報因院 937 資嚴院・大明

院 938 保安無量寿院・永寧院・廣嚴院・觀音院・丁山羅漢

院・明覺院 939 長耳相院・永興院 940 定慧院・金牛護法院

・光福院 934—936 無量寿院 936—947 資壽院・顯瑞院・華嚴

院・觀音院・傾心院・興善院

忠獻王弘佐(九四一十九四七)

941 甘露院・昭定院・永福院 942 広濟院・十三間樓石仏院・

清化永安院・崇新院・衆善院・仏日院・資賢寺 943 報國千

仏院・積善院・慶安院 944 華藏院・崇壽院・資崇院・宝相

院・宝積院・上智果院・鷲峯院・普向院・國恩院・保江院
・廣昭院 945 竜華寺・尊勝院・薦福院・靈鷲寺・崇寿院
946 雲岫院・靈泉院・宝福院・瑪瑙宝勝寺・招慶院 944—946
西閔淨化禪院

忠遜王弘倧(九四七十九四九)

948 慈雲院 949 恵德塔
忠懿王弘俶(九四九十九八八)

948—950 保慶院 951 承天寺・普濟院・多寶院・伝経院
951 靈

惠院・煙霞院 954 妙能院・靈溪院・西蓮院・興慶院・慧日

永明院・保安院 955 竜含院・羅漢院 956 常樂院 957 安吳塔

相院・長生院・看經院 958 資慶寺・弥勒院 959 超化院 960 光

相院・最勝寺・竜門院 961 報先院 962 靈智院・廣福院・界

石院 963 九曲觀音院 960—963 報恩院 964 聰明院・羅漢院・

普門院・法明院・兜率寺・千光王寺・還鄉院・文殊普賢

院 965 天竜寺・恩德院 966 般若院 967 雲棲院・菩提寺

保叔塔(又は僧永保建立)・南塔(重建) 963—968 普安院

興福院 970 六和宝塔(又は僧延寿建立)・報國院・天柱院

971 法灯院 972 善慶寺 974 淨亮院・万寿院・香龕寺・報先院

年次不明 聰果寺・西峯淨嚴院・天竺看經院・崇聖院・帰

義院・觀音院・觀音院(=安國院)

天興三年 慶恩院 広運中 法華院・瑞峯院・石屋院・西峯

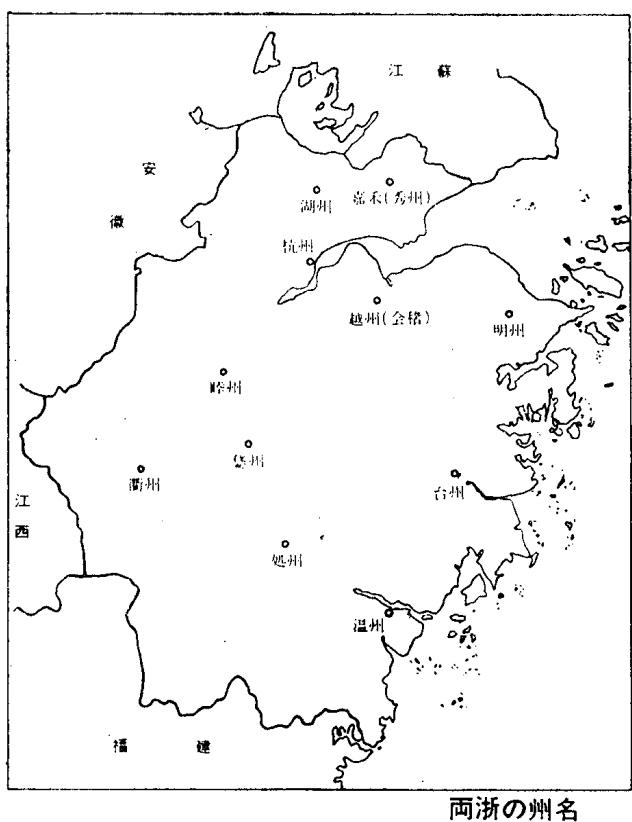
淨嚴院（寺か院かは類推によるものが多い）

以上は杭州府城内及び錢塘・仁和県内にあったものである。浙江一円となるとかなりの数にのぼる。この外に杭州付近で王以外の建てたものに、

941 恩平院（周璉） 942 崇福院（施光慶）・衆善寺（僧處齊）

946 護國仁王院（＝宝壽院）（？） 949 報國看經院（凌霄）

951 安吳寺（武肅皇后香火寺） 952 興福保清院（孟謙） 963 歲豊



両浙の州名

隆昌前期の禪宗は雪峯下が主勢力となり、巖頭下が一勢力を占め、他にわずかに洞山系などがある。八八〇年ぐらい即ち武肅王の時から忠獻王の没した九四七年ぐらいまでの範囲である。

〔嘉興〕〔湖州〕嘉興は嘉禾ともいわれ、五代には秀州といわれた大部分の範囲を占める地域である。湖州は吳興・烏程を中心とした地方である。この地方は仏教全般からみても振わず、禪宗も時代を通じてあまり入っていない。

二 雪峯玄沙の宗風の隆昌前期

院（田氏） 964 吉祥院（睦州刺史薛溫）・？報國羅漢院（同）
965 報國院（孫贊明） 966 香積院（許王） 968 宝勝院（全仁暉） 971
報國觀音院（太尉張公） 973 総持院（錢鄧王） 968—976 報國
觀音院（張彥、上と同寺か）・雷峯塔（錢氏妃） 977 香利院
(錢鄧王) 978 興福院（柯氏） ? 資福利濟院（朱可榮）
がある。『咸淳臨安志』（寺觀）は精力的に諸資料より拾
つている。幾分重複があつたりするが、五代時代の崇仏の
状況⁽⁴⁾の一端が汲めるであろう。禪宗の流れもこの影響を大
きく受けたものと考えられる。従つて前二期と隆昌二期と
の間には大きな変化があったとみなければならない。

院（田氏） 964 吉祥院（睦州刺史薛溫）・？報國羅漢院（同）
965 報國院（孫贊明） 966 香積院（許王） 968 宝勝院（全仁暉） 971
報國觀音院（太尉張公） 973 総持院（錢鄧王） 968—976 報國
觀音院（張彥、上と同寺か）・雷峯塔（錢氏妃） 977 香利院
(錢鄧王) 978 興福院（柯氏） ? 資福利濟院（朱可榮）
がある。『咸淳臨安志』（寺觀）は精力的に諸資料より拾
つている。幾分重複があつたりするが、五代時代の崇仏の
状況⁽⁴⁾の一端が汲めるであろう。禪宗の流れもこの影響を大
きく受けたものと考えられる。従つて前二期と隆昌二期と
の間には大きな変化があったとみなければならない。

特に嘉興はそうである。わずかに湖州清淨がおり、雲門文偃の本貫が嘉興であるというだけに過ぎない。蘇州から湖州にかけて長い間戦乱が続いた⁽⁵⁾ということと、西の杭州という大きな力に、もう一つは北の金陵に引きつけられて、空白地帯の状を呈することとなつたのである。

〔杭州〕この時期に入ると杭州へは雪峯の弟子孫弟子が大挙して福州より流入する。竜冊道惣（八六八—九三七）はじめ越州の鏡清禪院にあつたが、ついで王に請われて天竜寺に住した。かつて大梅の弟子の杭州天竜が開いた寺で錢塘県の慈雲嶺の南にある。このころ玄沙の弟子の重機も住し、つづいて羅漢桂琛の弟子の秀も住して活況を呈してきた。天竜寺は九六五年忠懿王が新たに拓いている。⁽⁶⁾道惣はついで竜冊寺に移った。くわしくは千春竜冊寺といい、九三四年に文穆王が道惣のために建てた寺である。翠巖令参・傾心法瑠・竜冊子興も続いて入り、竜冊寺は俄かに杭州における禅宗の拠点的地位を占めるに至った。道惣は師の雪峯から深く信頼を受けた人で、小惣布衲と呼ばれていた。武肅王錢鏐幕下八友の一人皮日休の子の光業は「辞学宏贍」の人で、多くの人を論破してきている。王命で鏡清禪院にて対論したが、「道惣の高論はその奥底を誰もつかめまい」と歎じている。阿部肇一氏は「ここにおいて吳越国に

おける仏教は道教との思想的混合を含みながらもその国内的位置として道教よりさらに優位へと進んでいったものと思われる。すなわち吳越仏教保護策の推進の一原因が存するといえよう⁽⁷⁾と述べられる。浙江の仏教保護の端緒が、仏教思想の高邁さと仏教者の高潔さにあつたのである。そしてそれは雪峯下の禪者によつてまず示されたのである。

耳相行修（一九五一）も雪峯の弟子で、九二七年西閔高峯に入った。『西湖志纂』では、この年「天台国清より錢塘に遊ぶ」という。耳が非常に長かったので長耳相と呼ばばれ、黙坐しただ人が問えば笑うのみであつたという。黙坐は雪峯の禅風であつたのである。『十国春秋』卷八十九では武肅王の天宝の時四明山に居たとし、宗慧大師と賜つたといふ。伝灯錄などに載つていないのである。文穆王元瓘はそこに長耳相院を建て、行修を任せしめた。大錢從襲も雪峯下で、後に余杭の大錢山に住した。大錢山の位置がまだわからぬが、錢氏にまつわる山名として、宋代に入つて名を変えられたのではないか。一〇〇八年（真宗の代）を境に錢氏の建てた寺院の名が全て改められていることからも察せられるように、吳越國錢氏にかかるものは一掃せしめられたと思われる。宋朝が体制を整えるとともに吳越国に処した厳しさの一端がみえる。

龍華靈照（八六〇—九四七）は高麗の人で、雪峯に学び、後に婺州齊雲山から越州鏡清院に入った。道惣・従襲・靈照は共に雪峯入寂（九〇八）まで隨侍しており、その後九三〇年前後に相ついで招かれて杭州に入っている。言語が流暢ではないらしく、荒っぽい印象を与えていたようで、鏡清院での皮光業との対論に答えなかつたために龍興寺に移された。ついで九三三年文穆王の建てた報慈院に招かれ住した。龍華宝乘院は吳越王が九四四年瑞萼園に建てたもので、金華の傅大士の靈骨と使つた道具即ち門をたたいた槌・金剛經を読む時に用いた拍板・藕絲灯の三物を迎えて寺に置き、塔をたてて、靈照を住せしめたのである。傅大士に関するものに

（婺州）陳善慧大士碑

陳侍中尚書左僕射徐陵撰

陳大建五年七月五日書（『寶刻叢編』卷十三）

（臨安府）吳越胡進思造傅大士像塔記

晋天福十年二月十一日惠龜記
在郊壇側淨明寺（同卷十四）

がある。傅大士に対する讃仰は弥勒信仰と結びついているのである。また「後漢大慈山建幢殘刻」⁽¹²⁾があるが、これは龍華寺主慧光真覺大師が天福八年（九四三）に建てたも

浙江における禪宗の推移 五代時代について（鈴木）

のである。真覺大師とは靈照のことであるから、慧光は靈照の号であるかもしない。嘉禾藏廩も経幢を立てていた。この前後には『仏頂尊勝陀羅尼』を主として全国的に経幢が善男善女の連名によつてたくさん立てられている。その目的は血縁の死者を弔い、安樂往生をねがい、福利安穩を念ずる現世利益に根ざしている。こういう流行が経文を中心とした。或は寺院を中心とした、又は住持を中心とした結社の形成に繋つていくのではなからうか。この辺のことは改めて考えてみるつもりであるが、一般の人々にとっては弥勒信仰と淨土信仰は同一の範疇にあつたと思える。藏廩・靈照にすでに見られるように、一般に向けた巾広い宗教活動のなされたことに留意しなければならない。禪淨思想が先に体系的にあつたのではなく、人々の願望を抽出する形で禪淨思想が表に出てきたと考えてみるとがあろう。

龍興宗靖（八七一—九五四）ははじめ台州の六通院に住したが、後に錢王の請で龍興寺に住した。衆、千余なるも三學講誦の徒ばかりであつたといわれる。この後名のある禅者は龍興寺に入つておらず、禪宗とは疎遠となつた。竜井通も雪峯の弟子で、靈石山の西南の風筭嶺上にある竜井に入った。この寺は九四九年凌霄という人が募金して建てた

報國看經院のことである。ここは後期に属する宝塔紹巖・永明道潛の茶毘に付されたところもある。

一方瑞竜幼璋（八四一一九二七）は江西高安の白水本仁（一九〇一~九〇四）に学んで、天台から杭州に入り、武肅王の請で瑞竜院に住した。寂後この寺は文穆王により宝山院と改められた。吳山の西南にある宝山にあつた寺で、九三五年に建てられた。幼璋については台州のところで触れる。杭州仏日は天台山から江西雲居山で道膺（一九〇二）に学び、仁和県東北五十里黃鶴山北の仏日院に入った。九四二年忠獻王弘佐の建てた寺であるから、仏日の住院もそれ以後のことである。宣州自新（一九三六~九四七）は『景德伝灯錄』に名を載せていない。しかし『宋高僧伝』卷三十によつてみると、明らかに雲居道膺に学んだ禪宗の人である。文穆王が宛陵を討つた時、広徳山（＝宣州広徳県祀山）にあってひとり逃げずに毅然としていた。そこで感にうたれてつれ帰り、武肅王にまみえさせ、武肅王は応瑞院に住せしめたという。文穆王が武肅王の命で吳を討つのは九一三年と九一九年のことであつたから、応瑞院への入寺はこの後のことであろう。また別に自新が宣城山中で道士的風格の奇僧に会つたことを挿話として並記し、後に宝塔寺主に充てられて寂したとす

る。道者的風格の禅者でなかつたろうか。宝塔寺は真身宝塔寺と呼ばれ、後に宝塔紹巖の住するところであるが、仁和県の南塔のことをいうのである。南塔には釈迦真身舍利塔があつた。『咸淳臨安志』には南塔は九五四~九五九年に建てられたといい、また九五八年火にあつて九六八年忠懿王が重建したという。しかし『十国春秋』卷七八・八一では天宝九年（九一六）冬十一月浮図を城内に建つといい、乾徳二年（九六四）四月、城南の宝塔寺を重建し、武肅王・文穆王の銅像を入れたと述べる。自新が没したのは天福中であるから重建以前で、また『臨安志』は『吳越備史』を引いて、「錢の武肅王は明州育王寺より釈迦の舍利を迎え、塔を城内に建つ」と述べるから、武肅王の建てた塔に住していたのである。また『宋高僧』卷十六の景霽は九二七年北塔寺に住し、ついで南真身宝塔寺に住せしめられたといわれる。これも焼ける前の南塔のことである。城の南にあつたので南塔と呼ばれるのであろう。一方北塔とは靈隱寺のある北高峯に古仏舍利を藏する七層の塔があり、北高峯塔と呼んでいた塔をいうのであろうか。乾徳三年（九六五）八月、宝塔寺を城北に重建したというから、これも九五八年四月の大火灾⁽⁴⁴⁾で焼失する以前の北塔をいうのである。北塔と北高峯塔が同一であるか否かはよくわからぬ

い。

続いて保福從展（一九二八）と長慶慧稜（八五四一九三二）に学んだ咸沢が靈隱山廣嚴院に入った。靈隱山はこれ以後隆昌後期まで禪宗の最大の拠点となつた。從瓌（一九七三）は竜華靈照の住した報慈院に入った。保安連も長慶に学んで臨安県の保安（院？）に入った。竜華彥球（一九六〇）、（九六三）は丹丘の六通院から功臣院に入り、そして竜華寺に住した。功臣院はよくわからないが、臨安県東一里にある大官山は錢氏になつて功臣山と名を改めているので、この山にあつた寺ではないかと思う。『宝刻叢編』卷一四に「梁新建功臣禪院記」があり、錢鏐が貞明二年（九一六）臨安県に建てたものであるといふ。先に令道が住しており靈照の弟子の道閑も住し、後期にわたつて盛況を來たした。功臣山は錢鏐の居所であったといわれ、禪宗が吳越王室と密接な関係にあつたことが察せられる。彥球は宝塔寺に住した四分律の景霽に学んだことがあつただけに、律師的な厳しさを持つて德行が高く、しばしば度戒もなしてゐる。上堂語中に「前には国王大臣及び有力の檀越に仏法を付囑したが、今日は郡の長官や諸官僚の請を受け愧入る思いだ」といつており、有力な外護者の要請で何度も上堂の

行なわれていたことがわかる。契盈も竜華寺に住し、ここもまた後期に至るまで盛んなところであった。法瑠も長慶の心印を受け、それから傾心寺に入り、晩年竜冊寺に住して寂した。先に道惣の住したところで、翠巖令參の弟子の子興もまたここに住した。竜華寺と等しく禪宗の盛んなところであった。天竺山の子儀（一九八六）は鼓山（一九三六）、（九四四）を継ぎ、忠懿王に招かれて羅漢・光福の一通場を開いた。羅漢と名づく寺は多くて決しがたく、光福も不明であるが、天竺山とは光福のあつたところかもしれない。『景德伝灯錄』卷二十一は光福での上堂語である。晩年は故郷の温州樂清県に帰つている。隆昌後期に属してくる人であるが、法系上から前期に入れておく。竜華靈照の弟子の帰は雲龍院に入った。この寺はもと水心寺と名づけられた。功臣山は錢鏐の居所であったといわれ、禪宗が吳越王室の住する水心保寧寺とは別寺である。

このように杭州を雪峯下で占め、わずかに洞山下が少し顔を出しているだけである。そして雪峯下が杭州に入るのも九三〇年前後を境にして以後のことと、それもほとんどが吳越国王の招請によるものである。閩国は九二五年忠懿王王審知が薨じて以後はとかく不安定となつてゐた。そこ

で安定して目覚しい發展を遂げている隣国の吳越国に移入するのは、ごく自然な流れである。福州における雪峯下の急激な進出は閩王室と結びついたものだつたし、錢王室の杭州を雪峯下一色に塗り潰したのを見る時、雪峯下という禅風の共通性を認めねばならぬであろう。しかも巖頭下が一部浙江に入つて地盤を築きながら、一人も杭州に入らなかつたことを知つてゐるから、尚更その感を強くする。

〔越州〕（紹興） 越山師郁は閩王の清風楼上での斎に招かれて行つた時、太陽を見て大悟し、雪峯の印可を受けた。後に諸暨県の越山に住した。玄沙は三種の病人をどのように方便して接得したらよいかについて問うてゐる。三種病人とは盲・聾・瘡瘍である。

ここに盲聾瘡瘍の三種の病を持つてゐる人がいた時、仏法の中でどのように方便して彼を接得したらよいであろうか。もし接得できるというなら聾瘡盲の人にどのように接得するか、もし接得できないというなら、仏法は断滅してしまつて、靈験は何もないということになる。さてこの問題をどのように量つたらよいか。

（『玄沙廣錄』卷中）

と参学者に問いかけてゐる。仏法を拒絶する者に対する実

際上の教化即ち接化手段を問うてゐるのであるから、観念的な態度では応じられない問である。越山は「三種病人」について頌をつくり、

盲聾瘡瘍は格調高し

これ何の境界か自ら担荷すと
昔日曾て玄沙に嚮つて道うも 笑殺す張三李四の歌

（『祖堂集』卷十一）

という。三種病人の公案は格調がそこぶる高いが、私はかつて玄沙に「なぜそんな境界に沈淪するのか」という答を示したもの、八公熊公のたわごとと笑いとばされてしまつた、という歌の意である。雪峯下の者は法兄の玄沙に学ぶ者が多かつた。^伍 越山もその一人であつたのである。師郁も雪峯に学んで、ついで杭州西興化度院に入る。西興鎮今は紹興府の蕭山県に属するので越州に入れる。九三二年文穆王が建てた。可休は雪峯の上足五指に入る一人であるが、越州の洞巖に入つたというのみでくわしいことはわからぬ。おそらく雪峯下の中で最も早く浙江入りした人と思われる。龍華靈照と龍冊道惣は先に述べたごとく、越州鏡清院に入った。『宋高僧伝』では鑑清院というが、鏡と鑑はよく混用される文字である。鏡清院の位置もわからぬが、「鏡清禪苑」といつてゐるので、浙江においても九

三〇年前後に、禅宗のための寺院が建てられたのである。

禅院のしめる割合は時代が下るにつれて増していき、元時代には教院とほぼ互角にまでなった。⁽¹⁶⁾ 鏡清院は資福智遠・風穴延沼・烏巨儀晏等の学地であるが、靈照・道忿なきあと衰微したようである。ただ風穴が余杭の生れで、ここに学んだということは、宋代の浙江における臨済禪伸張⁽¹⁷⁾の基本的条件として記憶にとどめておく必要がある。

次に長慶下の報慈従瓌が越州の称心寺に入った。称心寺は会稽県の称山（又は称心山）にあり、県の東北四十五里である。梁時代に建った古刹で、八五一年觀察使李褒が重建した。従瓌はついで杭州報慈院に入つたのであった。師訥は山陰県の西南百六十里にある清化山に住した。鴻仰宗の南塔の弟子の全付が江西の清化院から越州の雲峯山の清化院に入る。雲峯山の位置がまだ不明で清化山と同一であるかどうかわからないが、たしかに住した江西の清化院と同名にしたのであるから、雲峯山と呼ばれていたのが清化山と呼ばれるようになったのではないかと思える。全付が吳越国の戍将の招きで清化院に入るのは九三七年であつた。師訥の師竜冊道忿の入寂が同年であるから、同寺ならば、師訥もその後続いて清化院に入ったものと考えられ

る。

禅僧の住地者についてみると、越州は杭州と比して半分以下である。これも杭州が地の理を得て、政治経済文化の中心であつたからである。杭州が浙西の中心であるのに對し、越州は浙東の中心で、もともと或る程度拮抗する勢を持つていたのであった。しかし錢鏐が、越州に依つて大越羅平国（八九五年）を偽稱した董昌を、唐朝の形式的な命令を受けて、八九六年六月に滅ぼして以後、鎮東軍（越州）鎮海軍（杭州）等の節度使となつて、ほぼ両浙を支配下に収め、越州を東府（八九七年）としたものの、事實上、杭州に従属する形とさせた。この政治的な主従の關係は、当然外國貿易を盛んにして飛躍的に發展した経済の關係にも表われてくる。そして崇仏の錢王室の麾下に、宗教文化としての禅宗が集まるのも当然のことといわねばならぬ。⁽¹⁸⁾ 杭州に比して越州の禅宗は影が薄くなっている。道忿や靈照のように越州から杭州に入った人はいても、この時期に杭州から越州に入った例が見えないこともはつきりするであろう。

〔明州〕（寧波）令參が雪峯の記を受けて、明州鄞県の西五十里にある翠巖山に入るのは九三二年以前のことである。

浙江における禅宗の推移 五代時代について（鈴木）

る。その理由は上堂語中の「翠巖に眉毛があるかどうかを看よ」という言葉があり、長慶はその言葉を伝え聞いて、「生えて いる」と着語しているから、長慶の入寂以前のこととあらねばならぬ。因みに眉毛が墮ちるということは、『正法眼藏』・『三十七品菩提分法』に「あまりて仏法の商量すれば、眉鬚墮落し面目破顔するなり」というように人のために法を説きすぎると、眉毛やひげが落ち、顔がみにくくなる（癪病）というのである。第二義に下つての接化をいうのであるが、必ずしも批判的な言葉でのみ受け取るのは当らない。後に王に請われて龍冊寺に入った。四明無作は『景德伝灯錄』に載せられていないが、『宋高僧伝』卷三十では雪峯の堂奥に入った人とされる。律・法華・唯識を広く学んだ人で、江西の廬陵から予章に十年ほど住し、四明山に入った。江西においても浙江においても、一切権力者とのつながりを避けた。詩や書をよくし、礼讃文數十本を述べているということからも、禅を学びながらも禅者と規定しきれぬところがあつたと思われる。

この期の明州の禅はこのようにわずかである。後の表からもわかるように、仏教全体からみても、未開拓であつたといえよう。

「陸州」（嚴州）保福從展の弟子の敬連がひとり陸州に入つたが目録に名を残すのみで詳しいことはわからない。

「婺州」（金華）龍華靈照は九〇〇年ごろ雪峯を下つたと思われる。それから瑞巖師彦と共に一時台州に住し、ついで婺州斎雲山に移住した。金華県の東五十五里に東山という山がある。その最も高いところを斎雲岡という。『光緒金華志』では斎雲寺は芙蓉太輪の道場であつたという。婺州は交通の要地に当るため、禅者の交流も多かつたところである。後期に宝勝・遇臻が斎雲山に住して、婺州における禅宗の中心地の観を呈する。次に長慶下の宝資が婺州の金鱗報恩院に入った。報恩院は武義県東北六十里の金鱗山にあつた。玄沙下の瑠も婺州の金華山にある国泰院に入った。上堂語中に「妙明真心」といっているが、これは『楞嚴經』⁽²⁰⁾中の中心思想を示す語で、玄沙は度々この語を引いていた。瑠が玄沙の風を嗣いでいることが明らかである。

ところで雪峯系が福州から杭州へと北進したのと対照的に巖頭（八二八一八八七）系は衢州から台州へと東進する形で浙江に入っている。巖頭の孫徳謙と義昭は婺州に入った。徳謙は福州羅山の道閑に学んで、一時泉州招慶院に留

まり、金華県北十五里の智者山の智者寺の首座となつた。

智者国師にかかる寺で、金華第一の名刹である。ついで武義県東十五里にある明招寺に住した。この寺は南宋に入つてから、呂氏一党的功德院となつてゐる。「先輩たちもその敏捷さに畏れ、後輩は皆その鋒先を避けた」という锐さで、明招山に四十年間禪を鼓吹した。「明招の一拍は和する人まれなり」と頌し、遺偈に「岐に臨んで誰か吾が機に湊るを解せん」と述べているように、厳しい孤峻の禪であった。『興地碑目』の卷一に「明招院寿塔碑」をのせてゐる。広順二年（九五二）建つたもので、武義院にあると
いう。徳謙の塔碑と思われる。このころまで生存していたことがはつきりする。義昭は徳謙と法上の兄弟で、武義県南三十里にある金柱山に住した。

玄沙の弟子師靜は天台山の国清寺に三十余年間住した。もう一人静という人がいたので大靜上座と呼ばれていた。大藏經を読み、空觀佛教に立場を置いていた人である。国清寺という天台宗の本山に住して、教学の影響は大きかつたであろう。やはり玄沙の印可を受けた光緒は仙居県の雲峯に住した。かつて雪峯と同參の慧恭が住した黃巖県西北四十五里の瑞巖山院に続いて入ったのは、巖頭の弟子の師彦である。「終日愚のことくなり」といわれ、専ら坐禅の日々を送つたものと思う。しかも「衆を統括しては極めて厳整」であったといわれている。一時龍冊道憲が参じてゐる。龍華靈照の法嗣の師進も続いて瑞巖山に住した。ここは湧泉景欣の受業地である。

〔台州〕巖頭の印可を受けた瑞巖師彦ははじめ丹丘に住し、ついで請われて瑞巖山院に住した。龍興宗靖は雪峯に記を受けて後、台州寧海県丹丘の六通院に住した。一方石霜下の湧泉景欣の弟子紹も湧泉から六通院に入り、また長慶下の龍華彥球も住し、龍華靈照の弟子志球も住するという具合で、六通院はこの時期にはなはだ活況を呈した。景欣の住した寧海県の湧泉と丹丘六通院とはごく近いところ

瑞竜幼璋は相国夏侯孜の甥であるといわれている。はじめ天台山の福唐院に住し、ついで隱竜院に住したが、八四年浙東に飢餓と疫病が発生し、溫・台・明州の各地を回つて数千の遺骸を収めた。人々は悲増大士とあがめた。雪峯が丹丘・四明間をめぐった時、棕櫚の払子を師に与えていた。また天台山に金光明道場を建立し、僧俗を集め月余にわたる大会を開いた。

台州は越州について仏教の栄えたところである。天台智者大師開創という偉大な伝統によるところが大きく、また睦州・婺州・嚴州は西から、湖州・秀州は北から攻め込まれて、長い間戦禍に苦しんだのに対して、台州などは安定していたということも理由になろう。禅と天台との結びつきは早くも永嘉玄覺よりあつたが、禅の側から積極的な結びつきのあらわれてくるのは、瑞竜幼璋・国清師靜あたりからで、智者行滿（一九六八—九七六）・天台全宰（一九三〇）も禅的性格を備えた人たちであつた。次の天台德韶に至つて禅と天台の相互関係は頂点に達する。しかし禅と天台との相互関係は台州付近に限られており、禅一般に及んだものではなかつた。

〔衢州〕衢州は福建及び江西から浙江に入る入口に当

る。福建の王審知とは早くから和を保つたものの、吳の楊行密はしばしば浙江を犯した。衢州はそのために非常に不安定になつていて。それでもここに住した二、三の禅者が知られている。雪峯の弟子の仁が南台に住し、後に郷里の西安城南三里にある鎮境寺に住した。龍冊道惣の弟子の遇縁も衢州の南禅寺に入つた。南禅寺とはこの鎮境寺のことである。詳しく述べては九九五年南禅顯聖寺と名を改めた。別に衢州遇縁という人が龍華靈照の弟子にあるが、南禅遇縁と同一人である。龍冊と龍華は越州の鏡清院で同じ時期に住したので、ここで学んだ遇縁が両者の弟子とされ、『景德伝灯錄』ではそれが同一人であることに気づかなかつたのである。遇縁の生卒年は不明であるが、南禅寺と名を改めた年まで生存したとは思えないから、鎮鏡遇縁とするか衢州遇縁といよい方の方が妥当である。龍冊道惣の弟子の儀晏（八七六—九九〇）は『五灯会元』卷八ではじめて名の知られた人である。西安県東三十五里にある信安第一の山、烏巨山に住した。定力が深く、師の画像から舍利を得たといわれたり、目を患つた忠懿王がそれを聞いて画像を求める目が直つたということで、開明の号を賜つたということである。百十五歳の寿といい、神力があつたといふこと

ど、多分に付会があろうが、後世まで人々から深い尊敬を受けた人である。参考までに武肅王は晩年眼を患つて薨じてゐるから、その辺のことがかかわっているのかもしねい。

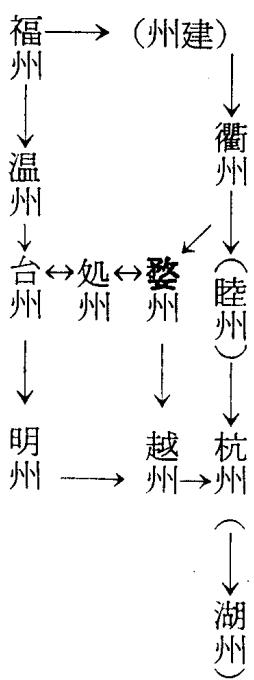
〔処州〕処州は台州と婺州の間にあり、浙江の中で最も邊鄙なところである。それでも長慶の弟子の翠峯従欣が住している。翠峯院は遂昌県の東山にあり、貫休が建てた寺である。

〔温州〕台州の瑞巖師彦に学んだ神祿（八七二—九七六）は温州太平県十都にある温嶺の瑞峯寺に住した。この寺は天福間（九三六—九四四）神祿のために建てられた道場である。太平県は明の時代に台州黄巖県と温州樂清県に分置された。温嶺は温州の東北隅である。「終日法堂にただ静坐するのみ、更に人の本来の心を問うこともなし」と頌しているように、意に契う人物は生れなかつたようである。ただ天台德韶に嗣いだ長寿朋彦が学んで一頭地抜きんでいた。このように巖頭下は都と離れたところに住した。そのため時流に乗れず断絶も早かつたが、志操堅固で、權勢を受けつけぬ厳しい禪者が多かつた。本来、前期の伸張期に属すべき人々であつたといふべきなのではなかろうか。龍

浙江における禪宗の推移 五代時代について（鈴木）

冊道惣の弟子で景豐という人が温州に住しているが、目録のみで不明である。

例えれば龍華靈照は台州に一時おり、婺州斎雲山に住し、そして越州に住して杭州に入った。龍冊道惣は福州から越州に入つて住し、そして杭州に入った。洞巖可休などは福州から越州に入つて住した。大錢従襲などは福州より杭州に入った。翠巖令參のように福州から明州に入つて住し、ついで杭州に住した人もいる。龍興宗靖は福州から台州に入つて住し、ついで杭州に入ったのであるから、翠巖と同じライン上にある。睦州敬連は漳州から（福州を通つて）睦州に出ている。湖州清淨は福州から（杭州を通つて）湖州まで進出した。別に瑞巖師彦は洞庭湖から台州に入つた。以上が主として福州から浙江に入った道筋である。以上を簡便に図化してみよう。



雪峯下が大筋で杭州を志向していることが判明しよう。そして巖頭下は衢州から台州の線上にあった。ここに同じ徳山下の流れを汲みながらも、雪峯下と巖頭下で禅風の違いが、地理的な面からさまざまと浮き上つてることに気づくのである。

三 煙熟の隆昌後期

〔秀州〕〔湖州〕前期に続いてこの両地方に住した人はほとんど記録に上ってこない。羅漢願昭が住しているだけである。はじめ秀州の西南一里にある羅漢院に住し、後に杭州の香巖寺に居した。『兩浙金石志』卷四に、「後晋石屋洞造象題名」の中で、

当院の僧願昭、謹しんで衣囊を捨て慶友尊者を鏽る。伏して亡考俞四郎・妣張一娘のためにす。生方を資薦し、淨域に超昇せんと、永く供養に充つ。時に癸丑の歲仲春の月九日、題して永く不朽ならんのみ。

といふ。考証では広順三年であるとする。おそらく羅漢願昭のことであろう。石屋洞は杭州に属し、南山の大仁院にあるが、願昭に関するのでここに記す。父母が淨土に生れ

ることを願つて慶友尊者を彫ったのである。慶友尊者は『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』（大正藏卷四九）の難提蜜多羅のことである。この經典で十六羅漢について説かれる。十六羅漢図については、貫休が夢に見たところを画いてより有名になる。そんなことも多分に影響しているであろうが、この石屋洞の一連の記録には羅漢像の奉納に関するものが多く、また『輿地紀勝』卷二では、羅漢像が五百体あるということを記している。それから錢塘の南一六里にある煙霞洞には十二尊の羅漢像があり、錢氏はそれを十八尊としたということも記している。願昭の場合、禪淨思想が具体的宗教活動として表われているのである。

それから少し触れておきたいことは、『桐鄉縣志』卷五によれば、悟空禪師（＝塩官齊安）の弟子如縱が、吳德寺後の賢待寺が会昌に廢されたので、感通中に復興して悟空禪院を建てたことである。錢氏はそれを吳興禪院と改めた。また『嘉興新志』に小西門南、爽溪の西の水西禪寺は会昌五年黃蘖禪師が開山で、ついで廢し、大中元年復興したという。共に前期に属するが、ここで拾つておく。

〔杭州〕竜華彥球に学んだ後は杭州の仁王院に住した。

羅漢桂琛下の秀は吳越の臣の田氏が九六三年に建てた歲豐

院に住し、それから名刹の天竜寺に入った。清涼文益と同門である。報恩慧明は臨川で清涼に学び、それから明州大梅山と天台白沙に庵した。雪峯・長慶の風ありとされ、機鋒が鋭かった。乾祐中（九四八～九五〇）忠懿王は資崇院に住せしめた。人々は慧明の説法は魔説であると言つた。そこで王は翠巖令參に命じて思憲院で検せしめた。この時の主な質問者は天竜秀及び資巖長老という人であつた。慧明は逆に雪峯の塔銘中の言葉を採つて質問したが、誰も答えられなかつた。たとえ答えても詰問を受けて立往生してしまうのであつた。王は喜んで円通普照禪師と署し、大報恩寺に住せしめた。報恩寺という名の寺は多い。大中祥符元年（一〇〇八）如意院と改められた寺は建隆中（九六〇～九六三）に建つてゐるが、慧明が寂した後だから当らない。文穆王が九三五年同名の寺を建てていたから、それを指すか、或は万松嶺上の報恩寺（七八五～八〇五中建立）を再建したのかもしれない。剛直で言にさからうことが多く、それが短所であったと『宋高僧伝』では評する。しかし質問者を葛藤に追い込んで、迷妄を打破し、直観的に真実を見るというのが玄沙の家風であつたから、表面的には言にさからうという様相を呈するのである。宋伝で雪峯長慶の家

風があるといつてゐるよりも、伝灯録で玄沙の正宗を以て闇外に置く、といつてゐる方がふさわしい。

宝塔紹嚴（八九九～九七一）は四明に隱棲していたが、天台德韶と共に臨川で清涼に学び、それから南屏山の南にある水心寺に住した。水心寺は二寺あり、後に雲龍寺・法雨院と改められた水心寺ではなく、水心保寧寺と改められた方である。「忠懿王の時、紹嚴禪師が蓮華經を誦すると、蓮華七本が庭に生じた」といわれる。藥王菩薩のように身を焼いて供養しようとしたが、錢氏に留められひそかに曹娥江に身を投じた。しかし漁師に救われた。衣を水面に布き、宝台に坐してゐたようであつたといわれる。それから越州に住し、それから杭州の真身宝塔寺に住した。大寧軍節度使孫承祐^{（ゆゑ）}が碑を作つた。心を明らめることを強調し、身中の妄想を離れて、外に本来の真心を求めるることは外道であるといふ。これは玄沙・法眼の家風である。しかしながら法華經を尊崇していたことは同参の天台德韶と同じで、天台の影響を大きく受けたものと思う。

永明寺の第一世は道潛（一九六一）である。河中の生れで七尺の偉丈夫であつた。山西永濟県東南一五里の中条山の大通存寿の許で出家し、五台山に登り、それから遊方し

て臨川の文益に学んだ。衢州の古寺で大藏經を聞し、それから阿育王塔を拝している。²⁴彙征大師が自ら檀越となつて三七日の普賢饌を行なわしめた。温州の彙征大師が杭州に入り、僧正となるのは天成中（九二六—九二九）のことである（報恩永安章参照）。塔寺での普賢饌はこのころのことと思われる。忠懿王は九五四年慧日永明寺を建てて招請した。月俸を給したという。竜興寺者已も月俸を得ていた。禅宗が錢氏の直接の庇護下にあつたことがわかる。僧の経済的な生活は、大寺の場合、福州雪峯山に代表されるような莊園制を採っているのに對し、ここでは給費制が導入された。莊園制の場合、大檀越の間接的な統制はあつても、直接に介入することはあまりない。従つて住持の任免にも僧団の意見が反映される。しかしこのように給費制となると、大檀越と信望の厚い僧との直接関係となつてくるので、教団の自主性は自ずと大巾に制約を受けてくることとなる。よくわからぬがこの給費制は全面的な制度でなく、ごく限られた僧に対する特別措置であつたようである。それにしても給費制は教団全体の發展という觀点からは、決して好ましいものではない。矮小化の道を辿らざるを得ないであろう。同門の天台德韶と比すれば自ず

と差がはつきりしよう。道鴻も清涼に学んで、延寿の後、慧日永明寺の第三世に住した。靈隱清聰はじめ明州の四明山に庵し、それから靈隱上寺に入った。上寺とは靈隱寺の上にある上天竺寺のことであろうか。それとも靈隱寺中の上院をいうのであろうか。はじめ清涼に参じた時、清涼が雨を指して「しとしと上座の眼の中に降つている」といわれたが、悟らなかつた。後に華嚴經を読んで開悟し印可を受けた。心性を問題とするあたりに、華嚴思想を基盤に置いた清涼を忠実に受けているといえよう。

永明寺の第二世となつた人は延寿（九〇四—九七五）である。晩年竜冊寺に住した翠巖令參に学び、ついで天台山で德韶に学んで法を嗣いだ。はじめ明州の雪竇山に住し、忠懿王が九六〇年延寿に靈隱山新寺を作らせて第一世として住せしめた。翌年永明寺に住したのである。ここに十五年間住し、一五〇〇人に得度した。六時に散華行道し、法華經一万三千部を念じた。『宗鏡錄』百卷『万善同帰集』六卷等を著わした。道潛は永明院に羅漢堂を作つたが、延寿はそこで宗鏡錄を著わしたので、宗鏡堂と呼ばれるようになつた。一心を宗とし、この一心よく万法を照らすこと鏡のことであるから宗鏡と名づけたのであるが、澄觀の万

有互有一心の説を受けたのではなく、宗密の一心を受けながらも、この一心は祖々单伝して師自身に至る達摩の心要を指すにはならない。⁽⁴⁾ 延寿が宗鏡錄百巻を著わした目的は、天台・華嚴・法相が互いに矛盾している点を補い、三宗を一心によつて綜合しようとした点にあり、性相を融会するため⁽⁵⁾ に華嚴⁽⁶⁾ 教学をもつて根本においたことは、宗密の立場と共通している。また『万善同帰集』に明らかなように、禪淨双修をとなえ、後世に大きな影響を与えている。淨土への讚仰は禪者の中において既に前期よりはつきり表われていたが、そこには民衆の中にある現世利益と淨土に往生する願いを汲み込んでいた。民衆は或る場合には弥勒信仰と融合し、また羅漢像の奉納にそれを托し、懺法の法会に参じ⁽⁷⁾ 、また觀音信仰と結び、そして真言の「仏頂尊勝陀羅尼」経幢の建立に願を籠めていた。安樂往生の願望は多様的形態をとっていたのである。それを論理的に「參禪念佛四料揃」として判釈し、僧に論理的指向を与えたのが延寿であったのである。

開化行明（九三三一一〇〇一）は延寿が雪竇山にいた時出家し、天台で德韶に学び、ついで受業師をしたって永明寺に住した。延寿が寂してから、能仁寺・六和寺（即ち開化寺）

浙江における禪宗の推移 五代時代について（鈴木）

華嚴志逢（九〇九一九八五）は余杭東山の朗瞻院で出家した。ここは円通縁徳・般若友蟾の出家の場所でもある。天台山の雲居道場で德韶に学び、臨安の功臣院に召されて居した。また忠懿王が九六四年に建てた普門院に住して第一世となつた。上堂語に

古徳は仏法のために行脚してまことに身を厭わなかつた。例えは雪峯和尚は三たび投子山に九たび洞山に上り往来したが、それだけしてもまだ入口を見つけることが

に住した。六和塔は錢塘江岸に立ち、潮を鎮める願いをこめて建てた。九級五〇余丈という大きい美しい塔である。延寿が建てたのである。やはり天台に学んだ慶祥は、錢塘門外の九曲城にある觀音院に住した。七尺余の豊かな体軀で、弁才に富み、多聞強記、天台門下で傑出しているといわれていた。願齊（一九七六—九八四）は水心寺で宝塔紹嚴に出家受具し、天台に学んだ後、温州の雁蕩山に入つたが九七二年忠懿王の長子惟濬が西閔に光慶寺を建て、請われたので住した。しかし幾ばくもなくして雁蕩山に帰つた。遇安（一九九二）は天福中（九三六—九四四）に建つた仁和県の北閔の傾心寺より、天龍寺を経て、九七四年この光慶寺に住した。多分願齊の後に請われて住したのであろう。

できなかつた。おまえたちこのごろの参考者をみると、ちょっと門を跨いで入つて来るだけで、もうわしが指導し禅法を説いてくれるのを待つてゐる。でもお前たち、禅の道に入ろうとするならば、そんなんのんきなことでよいか。ましてや玄旨を悟ろうとするのならばなお更だ。悟りには時節がある。心ざわがしく求めてもどうして得られようぞ。お前たち、時節を知りたいか。ならば今すぐ堂中に行つて静かに坐禅しなさい。(目前の)仰家峯がうなずいたら、わしはお前たちに説き分とう。

と、老婆心切なるものがある。しかも坐禅をもつて正道としていた。晩年吳越の将、凌超が五雲山に建てた靜慮庵(別名定慧庵)に居した。『景德伝灯錄』では華嚴道場といふ。華嚴院は天福中(九三六~九四四)吳越王が建てたものである。華嚴院も五雲山中にあるから、名目的住持となつていたのかもしれない。志逢は山下に出入する時、大扇を持って錢を乞い、肉を買って虎を飼い、虎が迎えに来る²⁴と乗つて帰つたということで、伏虎禪師と称されていた。慶肅も天台の旨を受け、臨安の功臣院に住した。「明暗色空」と称えるは、まさしく玄沙の息衝きを感じる。普門希弁(九二一~九九七)は九六三年越州清泰院に住し

開宝中(九六八~九七六)召されて華嚴志逢のあと普門寺第二世に住した。端拱中(九八八~九八九)に出家地の蘇州の常熟の延福院に帰つた。忠懿王は金を布施し、延福院に七級二百尺の塔を建てしめた。清昱(一九六八~九七六)は忠懿王が薛温に命じて九六八年三月城西の西湖に建てしめた奉先寺に住した。ここには清涼の法瓈も住している。報恩光教寺には第三世として法端、第四世として紹安、第五世として永安が住した。共に天台徳韶の弟子である。報恩光教寺はどうもわからない。報恩光孝寺ならば慧日永明院の後(一一三九)の名である。報恩永安は温州永嘉の人で、温州の彙征大師によつて出家し、大師に隨つて九二六~九二九年に杭州に入った。彙征大師はここで僧正となつた。永安は俗務を喜ばず、閩川に行こうとしたが、福州の乱れによるのであろう、路を変えて天台山に廻り、徳韶に学んだのである。同じく天台に学んだ徳謙は報恩寺に住したといふが、目録だけで詳しいことはわからない。慧居は天台の旨を領してより、忠懿王の命で龍華寺に住した。紹鑾も住していて、龍華寺は前期に続いて禅院の隆盛を保つてゐる。龍冊曉榮(九二〇~九九〇)は初め杭州富陽県南四十里大源村にある淨福院に住した。九四三年の創建である。つ

いで龍冊寺の第五世となつた。晩年は秀州の城中東道巷西にある靈光寺に入つて寂している。一方靈隱寺に住した人に処先と紹光がいたが、目録のみの人である。靈隱寺も前期に続いて禪宗の盛んなところであった。永明延寿以下、以上までの人は全て天台德韶の法嗣である。德韶自身は杭州にあまり縁を持たなかつたが、弟子はこのように多く杭州に地盤を持つたのであつた。德韶と忠懿王との深い関係によるところが大であろう。

道慈は靈隱清聰に学び、臨安の功臣院に住した。慶肅の住しているところで、禪宗寺院として前期から盛んなところである。願昭は前に触れたように、清聰に学んでから秀州の羅漢院に住したが、後に杭州の香嚴寺に居した。越州には香嚴寺があるが、杭州は位置が不明である。同様に清聰に学び、臨安の光孝院に入った道端は、後に師の住した靈隱寺を嗣いでいる。徳文は国泰に住したというが、国泰はどこにある寺かわからない。希円はかつて幼璋の住した瑞龍院に入った。遇寧は九五二年建てた西山の興福保清院に住した。靈隱清聰の弟子もこのように多く杭州に住してゐる。

壞省（九〇六～九七二）は永明道潛に学んだ後に、湖西の浙江における禪宗の推移 五代時代について（鈴木）

嚴淨院に住し、そのあと千光王寺に住した。はじめ律・法華文句・楞嚴を学んでいる。上堂語に「仏法は無事なり、昔の日月は今の日月なり、……『舉することもまた了り、説くこともまた了れり、一切は成現す』ということなくんばよし」という。太平に倦んだ禪宗への一沫の不安を覗かせている。故に入寂前に宝樹浴池⁽³⁾が現われても、あらゆる相は皆虚妄であると遺言するのである。志澄は道潛に学んだ後衢州の鎮境に住し、後西山の宝雲寺に住した。千光王寺は九五五年に建ち（『十國春秋』卷八一では九六四年とする）、九八五年宝雲寺と改められた。改つた以降の住持なのであろう。

永明延寿の弟子の津が杭州朝明院に住し、子蒙が富陽県に住している。

以上第四期の杭州の禪宗は全て法眼宗で占められ、天台徳韶の一門が圧倒的勢力を誇っていた。そして忠懿王の命で住持しており、錢王室と禪宗が密着していることがはつきりする。通仏教は低迷していく見るべきものはない。それよりも伝灯錄や宋伝にあらわれてこない庶民に対する応じ方が、残碑の隅に出てくるので注意すべきである。『景德傳燈錄』の終焉にふさわしい杭州の禪宗の華々しさであ

るが、延寿を最後に禅宗本来の激刺とした活力はみられなくなつた。本来『景德伝灯錄』に載つていなければならぬ僧の脱漏があるが、それは注の一七の表で補う。

〔越州〕清涼文益の弟子宝塔紹巖（八九九—九七二）は杭州の水心寺より越州の法華山に移つた。法華山は山陰県の西南三五里にある。晋の義熙中（四〇五—四一八）僧曇翼が法華經を誦すると普賢の応現を感じたので法華寺を置いた。後に天衣寺と改めた。開元二十三年李邕撰并書の「秦望山法華寺碑」が天衣寺にあるといふ。かつて律宗の玄儼（六七五—七四二）が住したところである。靈隱清聰はじめ明州の四明山に庵した。四明山は今は紹興府に属するので越州に入れておく。重曜は天台に学んで後、会稽県城の南三〇里の雲門山に住した。雲門寺は会昌に廢されたが、八五二年觀察使李褒が再建した。石霜の弟子の海晏の住した寺である。道孜も天台の旨を受けてより会稽県の雲門の西一里にある何山に住した。重曜も道孜も目録のみでくわしいことはわからない。ただ重曜については『十国春秋』に少し触れている。雲門寺は河中の三論を学んだ道亮や、律者で文に巧みな靈澈（七四六—八一六）などがいたところであつた。義円は天台を嗣いで、東山県漁浦の開善寺に住し

た。開善寺は許賢郷にあり、梁天監十二年（五一三）宝誌が許元度の宅の基に建てたといわれるもので、開善資宝寺といつた。宝誌が建てたとされる寺は湖州あたりに多い。古い寺は仮託されたのであろう。会昌に廢したが九三八年重建した。重建後に住しているわけである。安と朗も天台に学んで、観音院に住したが、詳しいことはわからない。瓊・五峯・敬璣も共に天台に学んでいる。瓊は紹興府西北二里にある地藏院に入った。これは錢儀が九七三年に建てた寺である。五峯は諸暨県にあるといふが、位置はまだ明らかにしえない。称心寺は会稽県城の東北四五里にある。かつて四分律・天台の大義（六九一—七七九）が住し、長慶の弟子の報壞慈瓌が住したところである。

道円は嵊県西二百歩剡山の麓の清泰院に住した。ここには報恩光教寺に入った永安もはじめに住している。默は上虞県西南四〇里の象田山に住した。『上虞県志』卷三九では県の西南二〇里に建福寺があつたが、この寺は九〇六年象田寺と改めた。この人も目録に名を残すのみである。宋及び自広も目録だけで詳しいことはわからない。共に大中禹迹寺に居した。百丈の弟子の禹迹契真の住したところである。行新は天台に学んで後、諸暨県西一五里群山中の碧

泉院に住した。九三九年に建った寺である。希弁ははじめ道円の住した清泰院に入ったが、後に杭州の普門寺に住したのであつた。普門寺の時の弟子の胡智が上林院に住した。上林院は余姚県上林湖山西にあり、俗に西山寺といわれていた。

越州も杭州と同じく法眼門下で占め、特に天台徳韶の弟子が大勢入った。しかし概ね目録に名を記すだけで、くわしいことはわからない。武肅王の頃までは越州は杭州に抗する勢を持っていたが、錢氏が杭州を行政の中心に据え、両浙を統合して以後、従属する形となつた。それもあって禅宗についても杭州と比して生彩を欠くのであろう。

〔明州〕報恩慧明は清涼の印可を得て後、鄞水の大梅山

に庵居した。

大梅法常の住したところで、早くも参学者が訪れている。ついで天台の白沙に遷つた。永明道潛の弟子の慶詳は奉化県東北三里にある崇福院に住した。梁の大同間に建つたという古い寺で、八四九年溪の東に移して重建した。布袋和尚の流寓の道場である。永明延寿は初め雪竇山資聖寺に住した。かつて常通の住したところである。宋代になつて重頭（九八〇—一〇五二）が出て一躍有名になる。『天童山志』に栄西が千仏閣を建てたということが載

つているので、ここに付記しておく。

明州は五代末まではまだ仏教はあまり盛んではない。宋代に入つて外国貿易の窓口となり、南渡して行在所を臨安に設けると、いよいよ繁栄してくるのである。

〔陸州〕この地方は前期に続いて見るべきものはない。

ただちょっと触れておきたいことは、嚴州府城東興仁門外東津山にある円通院は唐善導和尚の開山院であるといわれていることである。浄土教の善導の弟子の後善導のことである⁽³³⁾。杭州の禪淨思想に影響を与えていたものと考えられる。烏竜山の今の澄溪道院が徳韶の開山である、と『建德縣志』卷六でいっている。徳韶が後善導を尊崇していたのである。

〔婺州〕

巖頭系明招徳謙の弟子の保初が雙溪に入り、瑜が普照寺に住したことが注目を引く。雙溪院ははじめ普安院といつて、左溪玄朗の居したところであった。普照寺は金華府城にあつた。保初の示衆の語に、「未だ透徹せざれば呈することを用いられ」とい、瑜の上堂語に、「決することは鋒に臨むところにあり」という。共に徳謙の厳しい禪風を受けついでいる。玄沙下の国泰瑠に学んだ宝勝は齊雲寺に住した。金華県の東五五里にある十七都の齊雲岡に

ある。この寺は芙蓉太毓の道場であり、龍華靈照も住したところであった。後に天台德韶の弟子の遇臻（九九五）⁽⁴⁵⁾も住して、婺州において禅宗の重要な位置を占めていた。遇臻は歌頌をよくし、事に触れて作った三百余首が別集で伝わった。全肯は天台の旨を領してより、智者寺に住した。ここは明招德謙の学んだところで、金華県北二十五里にある。智者国師の建てた由緒ある寺である。太平興國中に席を法嗣の紹忠に譲り、本寺で帰寂した。沢も仁寿寺に住した。しかし詳しいことはわからない。

婺州は越州について台州と共に仏教の盛んなところであ

り、禪宗も比軸的に栄え、特に巖頭下が前期について法系を保ち、厳しい禪風を宣揚した。

〔台州〕天台文輦（八九五—九七八）は縉雲の明招山で徳謙に学び、ついで德韶に三十年隨侍した。伝灯錄になく宋伝に載っている。大藏經を三回通り読んだ。最後に浮図を作り、人々に柴を入れてもらい、自らを焚いた。人々に「念佛してわが往生を助けよ」といつていて。贊寧は評して勇猛心の往生であつて小乗の自殺にあらず、と弁護している。

天台德韶（八九一—九七二）は處州の龍泉県が本貫で、處

州の龍歸寺で出家した。信州の開元寺で受戒し、投子大同・龍牙居遁・疎山光仁に參じ、臨川で清涼文益の曹源の一滴水の話で豁然開悟して印可を受け、天台山に入った。浙江の禅宗の巨峯である。示衆で、問答を記憶してその道理を説く者の多い弊風を慨歎し、自身の問題をつき破らねばならない（脚跟下より一時に観破せよ）と述べ、そしてそれは今である（如今にのみよりて一時に驗取せよ、一時に徹底し会取せよ）という。多く般若の立場から論じている。法眼が華嚴の立場から論ずるに対し、そこに天台教学の大きな影響を感じる。義寂（九一九—九八七）は、破仏によつて天台の論書がなくなつたため、研究が進まず、ついに德韶を動かして、忠懿王に日本・朝鮮から佛教書を購入してもらっている。德韶と忠懿王とは早くから深い関係にあつたようである。忠懿王がまだ台州を治めていた時、德韶は懸記して、「他日霸王となつても、仏恩を忘れてはならない」とい、すみやかに杭州に帰国せしめている。⁽⁴⁶⁾まもなく胡進思の変があり、忠遜王に代つて位についたのである。德韶が国師と称せられ、弟子の多くが杭州で王の外護を受けていることからみても、忠懿王の德韶に対する尊崇の並々ならぬものを感する。王とは従兄の文奉が、よ

く徳韶に禄命を尋ねた。徳韶は「己巳八十一」と答えた。

文奉は八十一歳の長命と喜んだが、開宝二年（己巳）⁽³⁶⁾八月十一日に卒したという。実録によくある類の話であるが、錢王室との密接な関係が推し量られよう。徳韶は天台大師と同じ陳氏であるといつて、大師を尊敬し、大師の道場數十箇所を復興した。贊寧が徳韶の碑文を書いている。また宋伝の徳韶の章のあと、論じて、「禅に理あり、禅に行あり」と達摩の二入を延引し、「經はこれ仏言、禅はこれ仏意」と述べ、禅者が講家を退ける風潮を厳しく批判する。これは反面徳韶を称揚しているのである。伝灯録には般若寺における開堂十二会の説法が記録されている。これは徳韶の思想を知る上で欠かせないものである。般若寺も徳韶が顯徳七年（九六〇）に重建したものであったから、般若寺の開堂説法は晩年のものである。

報恩慧明は大梅山に居した後、天台の白沙に庵を建てた。

ここには五洩靈默や天台徳韶が住している。長寿朋彦も参じている。後杭州に住した。敬遵は法眼に学び、それから天台般若寺に住した。徳韶に学んだ善建省義も天台山に住した。師蘊（一九七三）は宋伝に載っている人であるが、徳韶と親しくしていた。滑稽な人で、その類の人とは

べったりくつっていた。だから達域の人は度外視していだが、徳韶だけは、測れない人といつていて。風狂の僧である。友蟾（一九九〇）も天台山で学んで雲居道場の普賢院に住した。後、般若寺に移った。受業の弟子の隆一にあとを譲って山内に卒した。天台徳韶のあと、般若寺を嗣いだ人ではないかと思われる。天台の紫凝山の普聞寺に住したのは智勤（一九九〇）である。天台徳韶は最も多くの弟子を育て、四方に任せしめた。また天台大師の遺蹟を復興し、教論書を日本・朝鮮に求めた。それらの背後に錢王室の深い崇敬の念があつた。更に睦州の烏竜山淨土道場の少康の塔を重建している。善導に学んで称名念佛を実践した人である。こういうことからも天台が単に禪宗だけで評価されるべきでなく、浙江の仏教全体の興隆者であつたとみなければならない。台州が浙江の中で最も安定していたところであることも幸いしたであろう。

〔衢州〕義は明招徳謙に学んで羅漢に住した。永明道潛ははじめ古寺に住し、大藏經を聞した。弟子の志澄は西安南三里にある鎮境寺に住し、後に杭州の宝雲寺に入った。鎮境寺は遇縁の住したところである。『景德傳灯錄』の目録で衡州としているのは誤りである。靈隱清聰の法嗣の可

先是西安県の南仁徳坊巷内の穀寧寺に住した。はじめ惠濟院といい、九六五年徽寧惠通院と改めたから、可先の住したのはそれ以後のことである。

衢州は伸張期に興善惟寛も住していらしく、仏教の比軸的盛んなところであったが、戦乱の関係か伸びなやんでいる。

〔廻州〕明招徳謙の弟子の契從は府の東南一里にある報恩寺に住した。また同參の究は青田県東一里にある湧泉山に住した。報恩宝資の法嗣澄は福林に住した。福林の位置はまだ明らかではない。それから靈隱清聰の弟子の師智がやはり報恩院に住している。寺というも院というも同じである。前期に属するが、『遂昌県志』卷四に、邑西練渓の光福寺は五代時代彦球が建てたという。彦球とは竜華彦球のことであろう。他にみられない記事があるので補つておく。

廻州は邊鄙なところであるが、巖頭下が二人住していることが印象に残る。それから報恩寺が廻州の禅宗の中心であつた。

〔温州〕温州も前期に続いて不振である。ただ五代末宋初に天台の弟子四人が住している。願齊は雁蕩山に住し、

後に杭州の光慶寺に招かれたが、幾ばくもなくして戻つた。遇安（九二四—九九五）と本先（九四二—一〇〇八）が瑞鹿寺に住し、可弘が大寧院に住した。温州の寺院は資料不足で位置が不明である。遇安は首楞嚴に長じていたので安楞嚴と呼ばれていた。棺に三日あつた。四衆が棺を開いて哀哭したのでそれをいさめ、上堂説法してまた棺に入り、棺を開かしめず入寂した。本先は風幡の話で大悟した。厳しい生活の中に志はいよいよ堅固であった。竹林集十巻がある。

四 結 び

『日本仏教学会年報』の拙論と本稿において、唐代より五代末宋初までの禅宗の推移を、地理上の把握を中心において見てきたわけである。各地域との相互の関係にまでは充分に論及できなかつたが、個々の実際の足どりがある程度明らかになつたと思う。浙江の場合、範囲を開拓期、伸張期、隆昌期と分け、隆昌期は前期と後期に二分して、全体を四期としてみた。この一応の区分も禅宗の伸展状況から妥当であつたと考える。初期の開拓期は文字通り禅宗

の広まつていく基礎の時期であった。この時期の特色は、(1)永嘉玄覺や法性印宗のように、教学から禅宗へという志向と、(2)牛頭宗が系統を保つて入つてきていること、(3)南宗系北宗系が散在すること、(4)地域に分散したこと、(5)期末には南宗と馬祖系の融合が起こつてゐること、(6)牛頭宗の徑山法欽が中心的存在であつたということ、(7)北（牛頭宗）と南（南宗）の合流地であつたということによるよう種々の点が挙げられるが、まだ仏教全体からみたら、主流を占めるまでには至つていなかつた。第二期の伸張期は馬祖系の進出によつて特色づけられる。そして各地に指を屈する人が現わされて光彩を放つてゐる。石頭下はその陰に没した。この時期は、(1)他の地方と共通して、有力な地方の官吏の外護を受けて伸展していること、(2)牛頭宗は南宗に合して断絶すること、(3)主流は西（江西）から入つてゐること、(4)杭州・越州が禅の中心になつてきたこと、(5)禅宗が教学と対等になつたこと、(6)禅宗においては会昌の破仏より黄巢の乱の方が打撃が大きかつたこと、(7)唐代の純禪が思いきり發揮されたこと等である。第三期の隆昌前期と第四期の隆昌後期とは一続きとみるともできるが、法眼宗の独自性、時代区分の年数のバランス

をとると、前後に二分した方がよい。隆昌前期は、(1)雪峯下の大量進出によつて南から入つてゐる、(2)また一部分巖頭下が西又は南から入つて前期を継承した。(3)雪峯下の進出は福州の政情によること、また雪峯自身に浙江への志向があつたことによる。(4)雪峯下といつても玄沙の大きい影響を受けており、後期の法眼宗とは異質ではないこと、(5)錢王室の庇護によつて浙江全体に浸透したこと等である。隆昌後期は、(1)天台德韶によつて禅宗が伸び、禅宗が仏教の中心的存在となつたこと、(2)他から移入せず独自の進展を遂げたこと、(3)錢王室の要求に法眼宗が合致していたこと、(4)従つて錢氏の滅亡と共にしていること、(5)禅宗がエリートとしての宗教から、民衆の中に生きる宗教として脱皮していく中で、禪淨双修の理論が打ち出された等である。

歐陽修は『五代史記』で、吳越錢氏について、「錢氏の終始を考えてみても、何ら徳を施していないし、甚しく民衆を虐げてゐる」と酷評している。筆者は錢氏の崇仏が宗教的情操にあるのではなくて、文化的或は芸術的欲求を満足せしめるためのものではなかつたかと考える。寺院の夥しい建立、特に幾つかの大きな美しい塔の建立は美的な欲

求を満たすために充分であつたろう。紫衣・謚号の乱発もそんな意識のあらわれである。錢氏一族には芸術的な氣風の人が多く、また宋朝に帰してからも、文筆家で有名な人が多い。歐陽修の「徳を施していない」という言葉には、崇仏が何ら評価されていない。ではなぜ法眼宗は応ずることが可能であったのであろうか。第一に教學が衰えて錢氏の要望に応じられなかつたのである。法眼宗は華嚴・法華・楞嚴・般若等の別はあっても、それらに立脚して、論理的に禪思想を詳しく説いていこうとする特色を持つている。また雪峯がそうであったように、坐禅を基盤に据えながらも、外部には積極的に広く応じていこうとする氣風があつた。勢い外護者の錢氏とは密接なつながりを持つゆえんである。そういう流れが民衆の側に向いた時、禪淨双修の形で変化していくのである。それと対照的なのが巖頭下の一派で、彼らは純禪の時代の氣風をそのまま備えていた。否むしろ雪峯下に対して一層尖鋭化したのではないかと思われる。巖頭は賊に殺された時、叫び声が十里四方に響いたといわれている。そういう激しさが巖頭下にはある。彼らの言葉に「鋒」という言葉が好まれて使われる。こういう厳しい禪は錢氏とは肌が合うまじ。彼らは山間に

住してしばらく法脈を保つたが、ついに途絶えた。しかし法眼宗も錢氏と滅亡を共にした。新しい宋朝の体制の中で法眼宗とは異質の雲門・臨濟宗が進出してくるのである。しかし朱子に代表される新しい儒学の勃興は、禪の理を取り入れながら、雲門・臨濟に代表される直観的な性格を持つ般若思想に基盤を置いた禪宗に、厳しい批判を投げかけたのである。唯識の基盤に立つ法眼宗ならば対抗し得たと思えるが、既に滅亡久しく、歴史の皮肉を感じるのである。

注

(1) 拙稿「浙江の禪宗に関する資料——唐・五代——」(『愛知学院大学文学部紀要』第五号、昭和五十年十二月)に、浙江地方で禪僧が関係を持った地名寺名の位置をくわしく述べた。

それでそのことに關する注は省く。上記資料を併せて参考されたい。なお『景德伝灯錄』『宋高僧伝』の引用箇所についてもわずらわしくなるので省いた。

(2) 第一期はまだ禪者は浙江にあまり入っておらず、慧能の弟子と牛頭宗が中心であった。南宗は石頭・馬祖の時は一時途絶えるが、牛頭宗は法系を保っているので、第一期は牛頭宗が中心的役割を果していたといえる。徑山法欽は石頭・馬祖と角立しており、かつ交流を保っていた。第二期の馬祖下進出の中継

者とみられる。故に徑山をもつて第一期の末とみておく。

(3) 第三期は馬祖下に代つて雪峯下が大量進出する時期である

から、第二期はその前までで、千頃・陳尊宿の卒年ごろまでとする。拙稿「浙江における禪宗の推移—唐末までについて—」

(『日本仏教学会年報』第四十一号) を参照されたい。

(4) 後周世宗の破仏(もしくは仏教整理)の時、「天下寺院で

残つたのは二六九四、廃したのは三〇三三六」(『資治通鑑』

卷二九二、顯徳三年条)といい、『十国春秋』卷七八で、杭州

の寺院で残つたのは四八〇といつてある。残つた割合だけからみても、杭州に寺院の多かつたことが察せられるであろう。くわしくは牧田諦亮『五代宗教史研究』中「五代王朝の宗教政策

」(平楽寺書店、昭和四六年)、阿部肇一『中国禪宗史の研究』中「五代吳越の仏教政策」(誠信書店、昭和三八年)を参照

(5) 吳越の錢鏐と吳の楊行密との間に激しい領土の奪い合いがなされる。そして蘇州以南が吳越国の領域となつた。

(6) 『十国春秋』卷八一で、割注して、天龍寺をつくり鏡清禪師を奉じた、とするのは誤りである。道惣は九三七年に寂しているからである。

(7) 阿部肇一、前掲書一二〇頁。

(8) 拙稿「戒律を重視した雲峯義存」(『印度学仏教学研究』第二三卷一号、昭和四九年)。

(9) 拙稿「玄沙師備と福建の禪宗」(『宗教研究』第二二四号

浙江における禪宗の推移 五代時代について(鈴木)

昭和五〇年)。

(10) 徐陵については『陳書』卷二六に載つている。

(11) 胡進思については『十国春秋』卷八八に載つている。文穆王の重鎮であったが、忠遜王を軽くみたために逆に怒りをかつた。そのため恐れをなし忠懿王をおし立てたが受け入れられず、憂懼をいだいて死んだ。術策家である。

(12) 『両浙金石志』卷四、二六左。

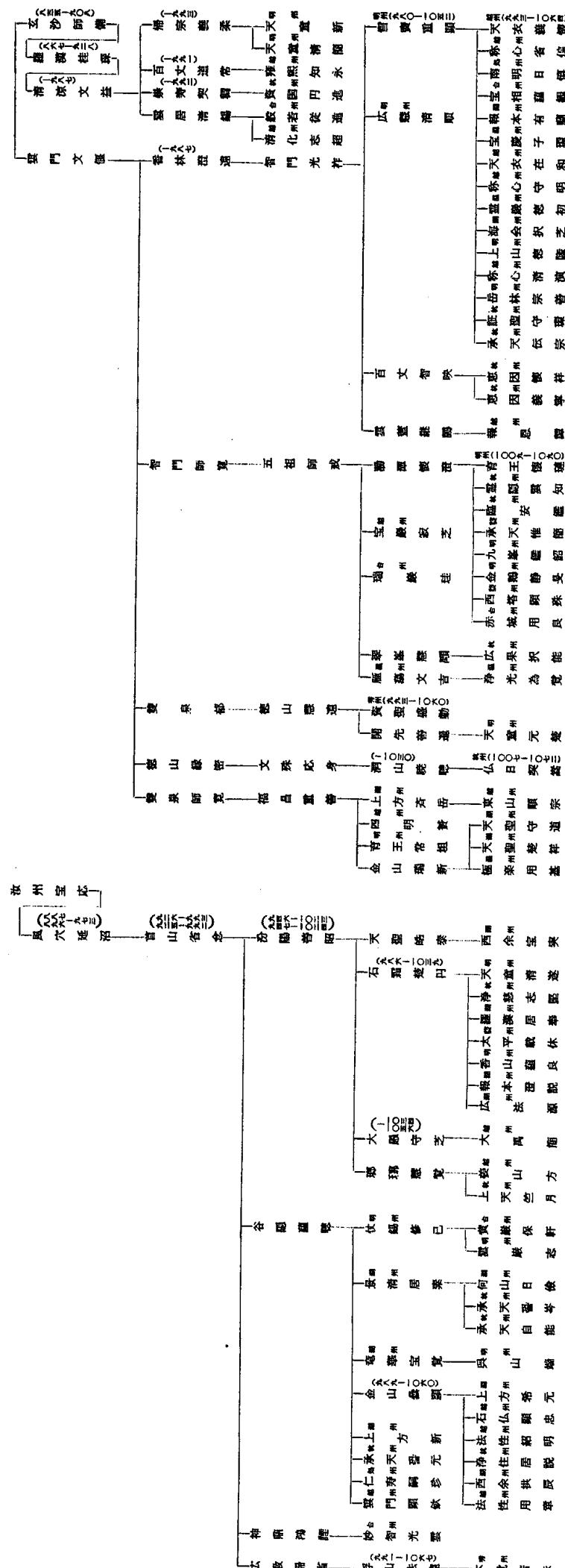
(13) 宛陵を討つたということはわからないが、九一三年李濤が二万の兵で衣錦軍を攻めたので伝瓘(文穆王)が救つて常州を攻めている。九一九年にも三万の兵で常州を攻めた。この二回の出兵の時のどちらかである。

(14) 城南より火が出て城内を殆ど焼いた。焼け出された家は一万七千余家という(『十国春秋』)。

(15) 前掲拙論「玄沙師備と福建の禪宗」参照。

(16) 高雄義堅『宋代仏教史の研究』六六~六七頁(百華苑、昭和五〇年)。

(17) 『景德伝灯錄』の世界は宋初で終末を遂げる。それは法眼宗の終焉とほぼ同じである。その後は、まず雲門宗が伸び、ついで臨済宗が盛んとなつていく。その過渡のところを『建中靖國統灯錄』を中心に抜いて表示しておく。既に臨済宗が進出しはじめていることがわかる。ただし言葉の残っている人のみを挙げた。(折込)



(18) 『資治通鑑』卷二六〇、乾寧二年条「六月庚寅、錢鏐を以

て浙東招討使となす。鏐また兵を発して董昌を討つ」。『十国春秋』では五月とする。

(19) 商業貿易で得た利益が非常に大きかったことは、北朝へのおびただしい貢物で知られる。また農地の開発に力を入れ、逃散の民を戻し、生産力を増大させた。苛酷な税は有名であるが一面免税などで生業につかせている面もあり、経済を税収だけに頼っていたのではない。岩波講座『世界歴史』九の斯波義信「商工業と都市の発達」を参照。

(20) 前掲拙稿「玄沙師備と福建の禅宗」参照。

(21) 「福州雪峯山故真覚大師碑銘」(『全唐文』卷八二六)。

(22) 『咸淳臨安志』卷七九及び『西湖志纂』卷四。

(23) 孫承祐(九三六—九八五)については『宋史』卷四八〇吳越錢氏世家中に付見として載っている(二一右)。

(24) 五台山信仰は早くからものであるが、このころから阿育王山の信仰が深まつていった。そして日本へも大きな影響を及ぼした。阿育王山は明州にあり、インドの阿育王が作った八万

四千基の一つであると信じられていた。道潛の場合、『宋高僧伝』では「杭州」といっているので、真身宝塔即ち南塔をいうのである。忠懿王は自らも八万四千の宝塔を作ったという。『兩浙金石志』卷四に「吳越金塗塔」が載せられている。

浙江における禅宗の推移 五代時代について(鈴木)

興越国王錢弘淑敬造八万四千宝塔乙卯歲記

その解説で、金塗塔の高さ六寸三分、重さ三十六両云々乙卯は顯徳二年である。武林市中では同種の鉄塔も見つかっている。

育王山信仰が日本に及ぼした影響については、「森克己著作選集第四卷」の『増補日宋文化交流の諸問題』中の「日宋交通と阿育王山」(国書刊行会、昭和五〇年)にくわしく述べられてるので参照されたい。

(25) 服部英淳『淨土教思想論』一六八—一七二頁(山喜房仏書林、昭和四九年)。

(26) 鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究』二三五頁(東京大学東洋文化研究所、一九七五年)。

(27) 藤吉慈海『禪淨双修の展開』一九八—二〇一頁(春秋社、昭和四九年)。

(28) 関口真大編『止觀の研究』中、塙入良道「法觀華懺法と止

」(岩波書店、一九七五年)。

(29) 『咸淳臨安志』卷七七、一三左)及び『武林西湖高僧事略』(続藏一三四、二三七b)。

(30) 宝樹浴地は周知のことく『觀無量寿經』に説く觀法をいう。千光瓊瑩が淨土思想を受けながらも、禪者の立場に立つていると察せられる。

(31) 宋王象之『興地碑記目』卷一。

浙江における禅宗の推移 五代時代について（鈴木）

(32) 『十国春秋』卷八三に次の記事がある。文穆王の第十一子の弘儀は越州觀察使となつた。越州は多く仏事を嘗む土地柄で雲門重曜と親交を持つた。弘儀は琵琶の名手であつた。弘儀が亡くなる時、重曜は、儀が天人の服をきて雲に乗つてやつてきて、「私は天に生れました」というのを夢に見た。重曜は夢からさめて、その模様を手紙に書き、「公の情操は雅にあるとみました。それで夢と合致します。しかし世禄は限られたもので

ました。顧くはますます修養を積まれんことを。」と書き添えた。しかし手紙がまだ着かないうちに弘儀は逝つた。十年後に墓が盜人のために暴かれたが、生きている時のようにあつた。それで越州秦望山の重曜の塔の側に柩を移した。

(33) 『嚴州縣志』卷六（夏日墩修、民国八年刊）、及び『嚴州府志』（清吳士進修・吳世榮増修、光緒九年増修重刊本）。善道は北地に実践的淨土教を興こした人であるから、ここにいたとは考えがたい。宋伝卷二五の睦州烏竜山淨土道場の少康は、

後善導と称されていたので、この人を指すのではないかと思ふ。塙本善隆『唐中期の淨土教』第十章 参照（法藏館、昭和五〇年）。

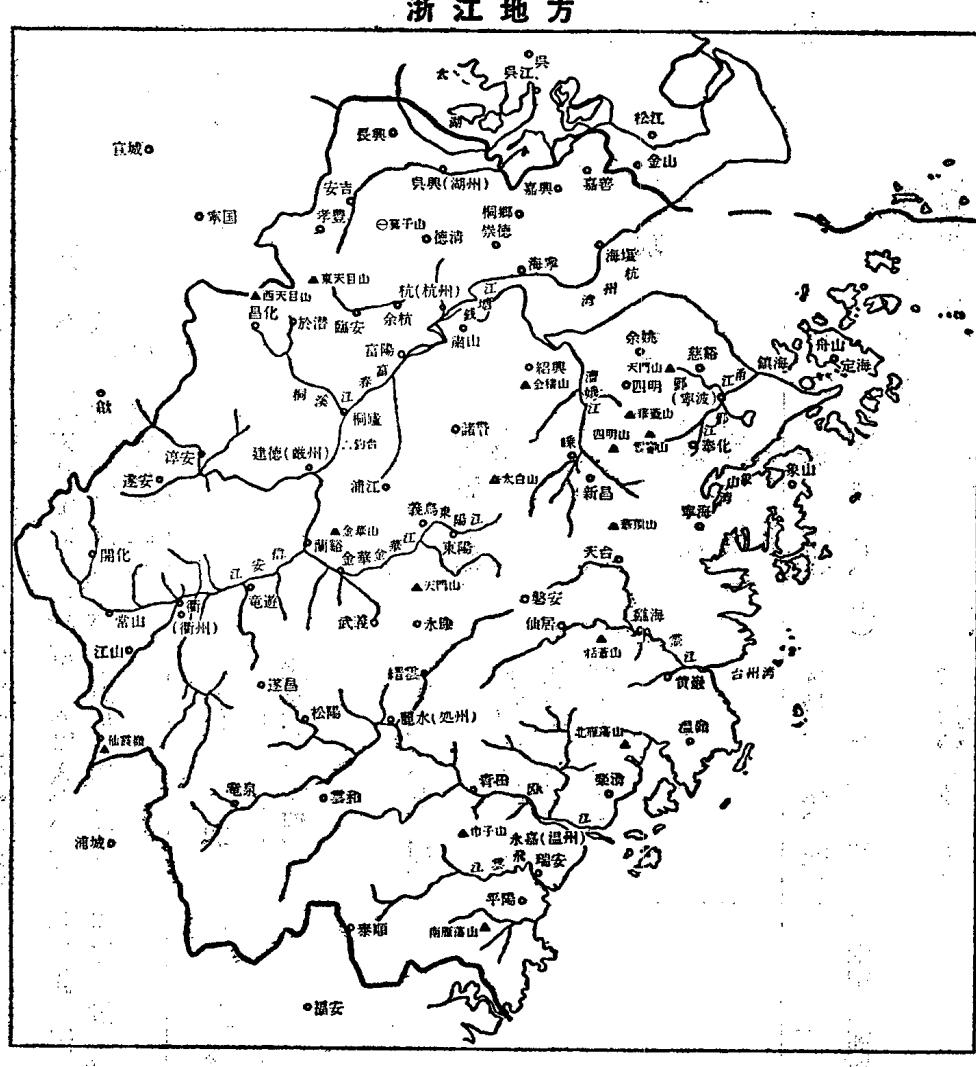
(34) 『十国春秋』卷八九。

(35) 同右、卷八九及び八〇。卷八〇で徳寂というのは徳韶の誤りである。

(36) 同右、卷八三及び『宋高僧伝』卷一三。

(37) 『兩浙金石志』卷五「宋天台般若新寺轉塔記」による。この碑文は九六一年に建つてある。

(38) 『西安縣志』で明果禪寺に白居易の伝法堂記がある（巻四四）といふ、また大徹禪師の道場であるといふ。『輿地碑目』に「唐白居易大徹禪師伝法堂記」が西安縣北玉泉鄉の明果禪寺に建したものである（『西安縣志』巻四四）。大徹禪師とは興善惟寬のことである。



浙江における禪宗の推移 五代時代について（鈴木）

浙江における仏教者的地方別年代別一覧表

(注) 数字は『宋高僧伝』の巻数、天は天台、起は起信論、涅は涅槃經、唯は唯識、三は三論、華は華嚴、文は詩文、書は書道、密は密教、神は神通・神異、風は風狂、通は通仏教の略、(禅宗関係は未記入)

嘉興	湖洲	杭州	紹興	寧波	金華	台州	溫州
(26)慧明(禪)	(29)皎然(文、律、禪)	(26)子璵(寫經)	(26)玄覽(興福、淨土)	(4)印宗(涅、禪)	(18)後僧會(神)	(19)封干、寒山、拾得(風)	
(14)守直(律、禪、起)	(5)靈一(律) (法詵(華、涅))	(14)道光(律)	(5)禮宗(涅、禪) (8)道亮(三、涅)	(14)玄儼(律)	(14)懷玉(念佛)	(9)玄覺(天、禪)	
(17)神龜(文)	(15)大義(天、律) (26)惟實(興福)			(6)智威(天) (8)處州	(6)湛然(天)	(6)慧威(天)	(8)處州

850		800	
(23) 元慧 （密）	(16) 常達 （律、天、道、書）	(16) 法相 （律）	(15) 真乘 （天、律）
(16) 允文 （律、涅、中、觀）	(30) 高閑 （律、書）	(11) 明覺 （禪）	(16) 慧琳 （律）
(7) 希円 （通）	(30) 曹無作 （書）	(16) 丹甫 （律）	(15) 道標 （律、文）
(21) 契此 （神）	(28) 宗亮 （興福）	(25) 遂端 （詭誦）	(6) 智藏 （禪、文）
	(20) 清觀 （天、文）	(30) 広修 （華文）	(15) 神迦 （天、文）
		(16) 文質 （通、禪）	(6) 神龜 （天、文）
		(27) 普岸 （律）	(15) 靈澈 （律、文）
		(29) 道遂 （禪）	(29) 教道晤 （通、道）
		(29) 道晤 （法）	

900

950

(8)皓端 (天、律)		
(7)晦恩 (天、律)	(16)景霄 (律) (17)可用 (通) (18)希覺 (律、易、文)	(7)虛受 (通、文)
	(25)行瑣 (律、誦)	
	(22)王羅漢 (神)	(30)貫休 (律、文)
(7)義寂 (天、律)	(23)文興 (禪) (24)師蘊 (風)	(16)從礼 (律、天) (23)道育 (修道) (25)鴻臚 (法華)
		(25)鴻臚 (法華)

〔昭和五十一年度文部省科学研究費（一般研究・D）による研究成果の一部〕